

第 39 回 わたくしの読書歴

時評めいたことを書くことには少々ためらいがあるが、近年のテレビドラマのなかに殺人事件が日常茶飯のごとく容易に取り入れられているのが目立つ。人命軽視の世相を反映しているといえばこれまでだが、無味乾燥な人殺しが同じドラマのなかで何度も出くわすと飽きてしまうのである。個人的には、視聴率を優先した作品といえども、殺人事件を取り扱うような作品にはそれなりに読者や視聴率を納得させる要素が詰まっているべきだし、多少とも感性に響くものでなければならぬと思う。

殺人事件といえばテレビがまだそれほど普及していなかった学生時代には医学部学生の間で評判が高かったミステリー小説はよく読んだ。クロフツ「樽」、ヴァン・ダイン「グリーン家殺人事件」、エラリー・クイーン「Y の悲劇」、アガサ・クリスティー「アクロイド殺し」「オリент急行の殺人」などの本格派推理小説が懐かしい。コナン・ドイルのシャーロック・ホームズとワトソン博士のように、クロフツではフレンチ警部、アガサ・クリスティーではエルキュール・ポアロ氏、「Y の悲劇」ではエラリー・クイーン自身がそれぞれの小説のなかで探偵や警部として活躍するのが興味津々であった。

今では学生時代には人並には読書したと思っているが、一方ではその頃から斜め読みの習慣があったためか。現在はこれと思いきわされるような作品は少ない。とっさに思い浮かぶのは、A.J.クローニン「帽子屋の城」「城塞」、夏目漱石「それから」、川端康成「伊豆の踊子」「雪国」、横光利一「旅愁」などであろうか。これはおそらく一読して気に入った作品は、斜め読みした後には何度か読み返すという昔からのもうひとつの習性のためである。横光利一「旅愁」は 20 歳代の初めのころ、気に入った個所(スイス・アルプスの山小屋の情景)は何回も読み返した記憶がある。仮にこれまでの年代を江戸時代の碩学佐藤一斎が幼・壮・老の三時期に分けたように、自分自身のそれを青年(大学卒業のころまでか?)・壮年・老年の三期に分けてみると、それぞれの年代で読書や映画・テレビの観賞などの嗜好がそれなりに変遷してきているようである。その世代ごとに自分自身の考えや生き方に合うような作品を好んでいたと思う。特に学ぶことが多い青年期までは自分の将来のあり方を探りながら勉学する多感な時期にあって、未知な男女間の甘美な世界を描いた作品を読むことが多かったし、壮年期では同世代の人物が目的に向かって努力するというような、加えてその時どきの自分の生き方や将来の目的を確かめられるような作品を好んだように思う。

このところ読書やテレビ観賞では歴史記録物や歴史小説が多くなっている。最近読んだ歴史記録ではカエサルの「ガリア戦記」がある。最近出版されたその翻訳書は、嘗て読み終えるのに四苦八苦したのとは違って、簡潔で理解しやすい文体になっていた。数多い歴史小説のなかでは、とくに今は惜しむらくは故人となってしまった司馬遼太郎・藤沢周平・池波正太郎などの作品に親しんでいる。あくまでも個人的なことだが、文芸作品には一般的にも筋書きの面白さに惹かれることはもちろんだが、歴史観や倫理観というような精神的底流がしっかりしていて、登場人物の行動に筋道が通っていると感じられ、情景描写や人情の機微表現などが深々とした美しい文体でえがかれているのが好ましい。文学作品も絵画や音楽と同じように読者の感性に合っていることが必要なのだろう。

司馬遼太郎(1923年～1996年)は第二次大戦後の日本の代表的な作家のひとりであり、その歴史観には同感できるところが多い。筆者より一世代上の司馬は大阪外語学校(現在の大阪外語大学)蒙古科に学んだあと戦車兵として招集され、22歳で終戦を迎えた。筆者が東大阪にある司馬遼太郎記念館を訪れた際に急いで記録したメモによると、終戦後の時期に司馬は「日本の国が悪くなったのは昭和になってからである。その昔は違っていたであろう」と思い、「自分への手紙」のなかで「日本人とは何か」について痛切に考え、はじめに考えたこのことがその後の作品のテーマの大きな流れとなったと述べている。35、6歳の頃から歴史的事実に関係する文献を渉猟し、それらに基づいて自らの歴史観を構築した。昭和38年出版の「竜馬がゆく」のために東京神田の書店街から買い求めた文献は3,000冊に及び、そのため書店街からその種の書物が無くなったというエピソードがある。坂本竜馬について司馬は「竜馬がいなかったなら、日本の歴史は今とは変わっていたのではないか」と述べている。司馬の歴史小説は叙述詩のごとく、その中にちりばめられた感性や情緒は抒情詩のように心に響く。筆者がこれまで繰り返し読んだ「坂の上の雲」について筆者は「古来より日本人は戦術に長けているが、戦略についてはわからなかった。日露戦争でそのことがわかるようになった。」と述べている。記念館における日露戦争終結後の当時連合艦隊司令長官東郷平八郎の書による「連合艦隊解散の辞」には明治の日本海軍武人の真髓を垣間見た気がした。太平洋戦争で昭和の日本人は、明治時代の日本人が目覚めた戦略の考え方を理解せず、結局国を台無しにしてしまったのである。

「菜の花の沖」は江戸時代の貿易商高田屋嘉兵衛がロシアの軍艦に捕らえられカムチャツカ半島に虜囚となってから、函館に捕らえられていたロシア軍人と交換で日本に帰国するまでの物語である。司馬は、高田屋嘉兵衛について「江戸時代の人に会えるなら、最も会ってみたいのは嘉兵衛である」という日本人の代表的な人物と考えていた。司馬遼太郎記念館には文献を含めて蔵書2万冊が保管されており、隣接する自宅に保存されているのと合わせるとそれらは6万冊に及んでいるとのことであった。司馬の歴史観が文献に裏打ちされていることには真実味がある。歴史について「大きな世界です。かつての何億もの人生が詰められている」(「21世紀に生きる君たちへ」)という司馬の思いは印象的である。

藤沢周平の小説には江戸時代の下級武士や庶民の人情の哀切さをえがいたものが多く、筋書きもさることながら情緒描写の美しさと人情表現の確実さが心に響く。そのような環境設定のなかで藩という組織に縛られた侍同士の決闘シーンには迫力がある。池波作品にも言えることだが、人を斬る場面の描写には確かに斬られたという事実が伝わるものの、残虐さや血なまぐさがそれほどには感じられないのは文学作品の質の高さを示しているのではないかと思う。藤沢作品では作者出身地の鶴岡を思わせる北国の海坂藩や桑山藩などの小藩の武士が登場するものが多い。「暗殺の年輪(1976年直木賞)」、「たそがれ清兵衛」、「三屋清左衛門残日録」「蝉しぐれ」「用心棒日月抄(孤剣・刺客・凶刃を加えて4部作)」などが思い出される。

池波正太郎の作品には江戸時代庶民の人情表現の巧みさと臨場感ある活劇に面白さがある。いまは「剣客商売」の秋山小兵衛や「鬼平犯科帖」の長谷川平蔵等は寝床で時々楽しんでいる。このところそれらの小説が映像化されて休日に放映されており、楽しみの一つになっている。

今後も私にとって、テレビ観賞も含めて歴史小説に親しむ時代は当分の間続くものと思っている。